

日本西洋史学会第 61 回大会小シンポジウム「第一次世界大戦と帝国の遺産」
2011 年 5 月 15 日（日本大学）

「共和制の帝国」の誕生：第一次世界大戦とロシア革命
池田嘉郎（東京理科大学）

はじめに：報告の狙い

- ①帝政期からソ連期にいたる過程を、民族関係に焦点を当てて、連続性の中で捉えること。
cf. 権力論: [ブルダコフ 1997]. 市民形成: [Sanborn 2003] [池田 2007]
ネーションのもつ社団としての側面に着目: [中澤 2009]
- ②その過程において第一次世界大戦が果たした作用を明らかにすること。
- ③連続性を重視しつつ、20 世紀論の成果をも取り入れること。とくに総力戦論 [和田 1992]

基本史料

Народы и области (『民族と地方』) 1914.5–1914.12 : 「ロシア諸民族団結協会」(1909 創立) 機関誌。カデット左派オブニンスキーが主筆。領域的民族自治を支持。

Национальные проблемы (『民族問題』) 1915.5–1915.9 : 民族問題に関心をもつリベラル～社会主義者を糾合。文化的民族自治を支持。

1. ロシア帝国のコーポラティズム

- ❖ ロシア帝国：身分・領域・信仰・職業など様々な範疇の単位から編成（とくに国家ドゥーマ（下院）選挙規程）
- ❖ 国家ドゥーマ臨時召集（露暦 1914.7.26）：諸民族代表がとくに発言
- ❖ 「民族」の内実は多様：①身分・歴史的特権（ex. 沿バルト・ドイツ人、ユダヤ人、グルジア人）、②社会経済的集団（ex. ラトヴィア人、リトアニア人）
- ❖ 開戦により、多様な内実を伴いつつ、「民族」が帝国の政治においてもつ意義が増す
代議員ゴドネフ「私はここではロシア人としてではなく…カザン県に暮らすタタール人、チュヴァシ人、チェレミス人に選ばれたものとして」発言 [『レーチ』1914.7.27]
- ❖ その前段階
 - ・ 1905 年革命期の自治・連邦論 [加納 2001]; 下院民族フラクション [ツイウンチュク 1997]
 - ・ 「バルカンの諸事件と、とくにアルメニア問題とマケドニア問題」による自治・少数民族への関心 [『民族と地方』№1. 1914.5.1]
 - ・ 第一次世界大戦：諸民族の擁護が正当化の根拠に（開戦過程は[Lieven 1983]）

2. ロシア人の地位：帝国の支配民族か？

- ❖ 「身分」「階級」で分断、国民国家化を経ていない。cf. 名望家層の不在 [石井 1991]
- ❖ 「ロシア人」「ロシア文化」はウクライナを含むのか？ [中井 1995][ミレル 2006]
- ❖ トルケスタン：ロシア人入植者と「異族人」[カザフ人などに適用された身分]の対峙；異族人の隔離入植論とアパルトヘイトの類似性 [西山 2002]
 - ・ だが「畜産者に特化した異族人」、「植民者＝ロシア人」は、ロシア帝国のコーポラティヴな政治秩序における一単位でもある。
 - ・ 国家ドゥーマ選挙の「ロシア人」カテゴリーは辺境に特徴的（帝国支配と辺境における民族対立の先鋭化[高橋 1990]）

3. 総力戦のデモクラシズム

❖ 大戦中、「民族」範疇の意義の増加←総力戦のデモクラチックな側面（①成員間の負担の均等化、②政治的権利の増加）

❖ 総力戦による日常の政治化（兵役・軍役、強制追放、動員）→現地住民の言葉・文化・宗教への配慮が重要に→ロシア中央部では「階級」、非ロシア人地域では「民族」が政治動員の重要な範疇に。

ロシア軍の隊列で 35 万人以上のユダヤ人戦士が戦っている以上、ユダヤ人の権利拡大請願を提起することが現在公正である。（ペトログラード市長イ・トルストイ、1914.8.10. 『民族と地方』 №3-4-5. 1914.9.1）

❖ 同様に総力戦は、社会生活における経済対立を深めることで、「民族」の社会経済的な理解を（身分的な理解よりも）重要なものとする。

われわれのもっとも深刻な民族問題は、戦争のために、帝国の西部と南東部の国境地帯で発生することになった。破壊と死が現在支配しているそこでは、民族的敵意が根を張った。それは社会的な敵対関係によっていっそう鋭さを増した。ウクライナ人、ポーランド人、ユダヤ人の反目は、かなりの程度まで、社会経済的な前提状況に由来している。アルメニア人とクルド人、アルメニア人とタタール人 [アゼルバイジャン人] の敵対、アルメニア人に対するグルジア人の敵意にしても同じである。（経済学者エヌ・オガノフスキー「解放されたアルメニアの二つの問題」『民族と地方』 №2.1915.7.20）

cf. ドン・コサックについて [Holquist 2002]（ただし帝国のコーポラティズムへの関心は薄い）

❖ 総力戦・民族・民主主義の親和性（二月革命後には社会主義も）

ベラルーシ人民は（その知識階級と同様）、全体が住民中の勤労階級に属する。それゆえベラルーシ人民の民族的諸権利を擁護し強調することは、地域の勤労人民の諸権利を擁護し強調することである。この場合、「ナーツィア」と「デモクラティア」の概念は完全に一致する。（ベラルーシ詩人エム・ボグダノヴィチ「ベラルーシ人」『民族問題』 №2. 1915.7.20）

❖ 非ロシア人地域では、支配階級と被支配階級が通常異なる民族に属するので、「階級」概念は「民族」概念に回収されやすい [青木 1977]

❖ 総力戦による政治参加の余地の拡大（傷病兵・難民支援委、ラトヴィア人狙撃兵部隊、ブリヤート衛生部隊） [Gatrell 1999][Gatrell 2005]

4. 民族と帝国

❖ 「民族」範疇のもつ動員力の増大→民族エリートはロシア帝国というコーポラティヴな空間を前提として、その一つの政治的単位として発言権の増加に努める。

[リトアニア社会の諸分野を概観して] 以上のことから、リトアニア人民がすでに、みずからの地方的必要事をより自立的に管理できるまでに成熟したことは明らかである。（のちのリトアニア首相ヴェ・ペトルリス「現代リトアニアに関する幾つかの事実データ」『民族と地方』 №8. 1914.12.1）

❖ 民族の利害を実現するための場としての帝国

リトアニア諸社会団体による総司令官ニコライ大公宛て声明：[東プロイセンのリトアニア人地域にいる] われわれの国境の向こう側の血を分けた兄弟が、ゲルマンの頸木から解放され、われわれと再統合されることをわれわれは信じている。なぜならロシアの歴史的な使命は、諸民族の解放者たることなのだから。（1914.8.22. 『民族と地方』 №3-4-5. 1914.9.1）

グルジアの不倶戴天の敵、トルコの対ロシア宣戦は、民族の自然発生的な熱狂をよりいっそう強いものとした。トルコ領グルジアの最後の州であるラジスタンの再統合が予見される。そこには国境線からトラペゾンドにいたるまで、グルジア民族のラズ＝メグレル種族が暮らしているのだ…これによりロシア帝国領内における歴史的グルジアの政治的統合は完了し、グルジアのムスリム化された諸州の再ナショナル化のための好適な土壌が得られることになる。(グルジアの政治活動家ゲ・ヴェシャペリ「グルジア」『民族問題』№2. 1915.7.20)

ユダヤ民族はみずからの文化的＝エスニック的特性を失わずして、国家の中で完全な権利主体となりうるか。単一型の国家では…克服しかねる困難があろう。それが実現可能であるのは、多くの民族、種族、人種を統合し、多くの宗教、言語、文化を結びつける、偉大な「帝国」においてのみである。(ユダヤ人政治活動家ゲ・ランダウ「ユダヤ民族と帝国」『民族問題』№1. 1915.5.20)

5. モデルとしてのイギリス帝国？

❖世界戦争によって帝国再編の可能性 (ex.ポーランド自治)。リベラル左派はイギリス帝国にモデルを見出す。

- ・ヘルシンキ大学教授コルフ男爵『大ブリテンの自治植民地』(1914.2)：「イギリスは植民地の自立性を自発的に承認した」[コルフ 1914]
- ・カデット[立憲民主党、リベラル]左派オブニンスキーの高い評価：自治領による戦争支援は同書の結論を裏書(『民族と地方』№3-4-5. 1914.9.1)
⇒青年トルコ党の中央集権化を批判([ボグチャルスキー 1914], 『民族と地方』№1. 1914.5.1)

❖だが、イギリス帝国の現状をロシア帝国の再編案として適用できるか

- ・イギリス本国と自治領は文化・経済面で相対的に同質
- ・帝国再編は主権の問題にかかわる

今日、地方(プロヴィンツィア)と主権国家の間には数十の階梯、段階がある[コルフ 1914]

❖カデット主流：主権の問題に敏感。左派と異なり、領域的民族自治に反対。例外はポーランドだが、ここでも自治構想は限定的。

「ポーランド王国の政体法案」に関するココシキン報告、カデット党協議会、1915.6.8：戦後のポーランド自治は「独自の行政と、地方議会が実行する立法をもつが、全国家的問題については全体に従う」。オーストリア帝国のガリツィアやクロアチア、それに第三次アイルランド自治法と同様(⇒ハンガリー王国やフィンランド大公国のような同君連合ではない)[カデット党大会 2000]; 第三次アイルランド自治法の限定的性格は[勝田 2010]

6. 二月革命

- ❖臨時政府(カデット中心)：民族的・身分的差別の撤廃、男女同権、事実上の共和制
 - ・総力戦体制に著しく適合[和田 1983]
- ❖コア地域の国民国家化と、国民-準国民のヒエラルキーに基づく帝国秩序の整備という近代帝国の段階を一気に飛び越えたかのよう[山室 2003]
- ❖実際にはロシア帝国のコーポラティヴな構造は変わらず[池田 2007]

7. 自治のパレード

- ❖ 革命：権力の再定義と再分配。主権の所在はナロード（人民／国民／民族）に
- ❖ 臨時政府は「人民」代表の地位を独占しようとするが、ソヴィエト運動が対抗。さらに、総力戦の中で意義を強めた「民族」も主権の担い手として浮上。

革命を行なったのはロシアのナロードではなく、ロシアの諸ナロードである。彼らの民族感情は、小民族の解放を掲げた戦争によって覚醒させられたのだ（第 8 回カデット党大会、1917.5.11、キエフ州党委員会代表ブテンコ）。[カデット党大会 2000]

ウクライナ総書記局がウクライナの機関ではなく単なる臨時政府の機関となることへの不満 ([ヴィンニチェンコ 1920])

- ❖ ペトログラード・ソヴィエトの講和方針「民族自決」。交戦諸国に大きな影響 [メイア 1983]
- ❖ 「民族自決」がロシア国内で意味するもの：諸民族エリートが民族自決理念に基づき「自治」を宣言、旧帝国の刷新を図る (cf. [小沢 1995] は「国民自決」と「一国民体一国家原理」の結びつきをよりリジッドに想定しているのではないか)

- ・ 1917 年の民族運動の概観は [ブルダコフ 1989]

- ❖ 「文化的民族自治」と「領域的民族自治」：[山内 1986][尼川 2001]

- ・ 原理的には対立せず [イスハーコフ 2004]

- ・ 重要なことは、各民族の「自治」宣言が、旧ロシア帝国のコーポラティヴな政治空間を再強化する方向に働いたこと。さまざまな「ロシア民主連邦共和国」案。

- ・ 同様に自治宣言は、コーポラティヴな政治単位としての「民族」の強化を目指す

教育事業は人民の手に移らなければならない。すなわちナーツィアは法的権限をもつ集団として、一定の国家機能を担う機関とならねばならない。(アルメニア社会民主党、1917 年 7 月。[ディマンシテイン 1930]402)

神学はヴォチャーク語でのみ教授される。(ヴォチャーク[ウドムルト]人知識人勢力大会決定、1917 年 6 月。[ディマンシテイン 1930]420)

- ❖ 自治宣言はロシアからの離脱ではなく、ロシアの刷新のためのもの。コーポラティヴな政治秩序を維持するための民族自決

若し、分離を云ふならば第一に分離したのは邊境地方にあらずして中央、即ち、莫斯科であった。[スタンケーヴィチ 1930]17

- ・ cf. ペレストロイカ期の「主権のパレード」との類似性 [塩川 2007]

むすび：ポリシェヴィキによる「共和制の帝国」

- ❖ 自治共和国という発明：ポリシェヴィキ政権が、「自治」を掲げる民族エリート（の一部）と提携して創出。バシキリア（1919.3.23）が最初 [Schafer 2001]

- ・ 諸民族に一律に共和制を適用：中央集権化、総力戦、国民国家という世界大戦の要請に対応
- ・ 他方で、コーポラティヴな単位としての「民族」範疇に、主権者としての地位を与えて国家制度化

(スターリン：共和国と自治共和国の実質的な差はない [Smith 1999])

- ❖ 第一次大戦の果たした役割：帝政期のコーポラティヴな諸単位のうち、よりデモクラチックな性格をもつものが、総力戦と革命の中で近代政治の概念に読みかえられたのち、継承された。「農民」（身分・選挙単位）と「労働者」（選挙単位）は、「階級」に読みかえられた上で、ソヴィエト共和国の市民に。「民族」（身分・選挙単位）もまた、自治共和国の主権者に。共和制による帝国の再編という意味で、ソ連は「共和制の帝国」。

❖ 帝政期とソ連期：断絶でも単なる継続でもない。世界の一体化という時代にあつて（帝国主義）、20 世紀的な要請に短期間で対応することを迫られた後進社会が（世界大戦）、あくまで現有の材料をもとにして自己変革。コーポラティヴな政治体制は継承。この、「古いものを残したままの現代化」というあり方自体が、特殊 20 世紀的。

参考文献

[『民族と地方』] Народы и области

[『民族問題』] Национальные проблемы

[『レーチ [言葉] 』] Речь (カデット党機関紙)

[ボグチャルスキー 1914]: В.Богучарский. Предисловие к русскому переводу. В кн. Э.Ф.Найт. Революционный переворот в Турции. СПб. (ロシア語版への序文。ナイト著『トルコの革命的転換』英語の原著 1909)

[ブルダコーフ 1989]: В.П.Булдаков. «Национально-освободительное движение народов России в 1917 г. и крах российской буржуазной государственности». Исторические записки. №117 (「1917 年のロシア諸民族の民族解放運動とロシア・ブルジョア的国家統合の瓦解」『歴史紀要』)

[ブルダコーフ 1997]: В.П. Булдаков. Красная смута: Природа и последствия революционного насилия. М. (『赤い動乱：革命的暴力の性質と結果』)

[ヴィンニチェンコ 1920]: В.Винниченко. Відродження нації. Ч.1. Київ (『民族の再生』)

[ディマンシテイン 1930]: С.М.Диманштейн (ред.). Революция и национальный вопрос. Документы и материалы по истории национального вопроса в России и СССР в XX веке. Т.3. М. (『革命と民族問題——20 世紀のロシアとソ連邦における民族問題の歴史に関する文書・資料』第 3 巻)

[イスハーコフ 2004]: С.М.Исхаков. Российские мусульмане и революция (весна 1917 г. – лето 1918 г.). 2-е изд., испр. и доп. М. (『ロシアのムスリムと革命 (1917 年春–1918 年夏)』第 2 版)

[コルフ 1914]: С.А.Корф. Автономные колонии Великобритании. СПб. (『大ブリテンの自治植民地』)

[ミレル 2006]: Алексей Миллер. Империя Романовых и национализм. Эссе по методологии исторического исследования. М. (『ロマノフ帝国とナショナリズム——歴史研究の方法論をめぐるエッセイ』)

[カデット大会 2000]: Съезды и конференции конституционно-демократической партии. Т.3. Кн.1. М. (『立憲民主党大会・協議会』)

[ツイウンチュク 1997]: Р.А.Циунчук. «Имперское и национальное в думской модели российского парламентаризма». В кн. Б.Гаспаров и др. (ред.). Казань, Москва, Петербург. Российская империя взглядом из разных углов. М. (「ロシア議会主義のドゥーマ・モデルにおける帝國的なもの、民族的なもの」、ガスパロフ他編『カザン、モスクワ、ペテルブルグ——多面的に見たロシア帝国』)

[Gatrell 1999]: Peter Gatrell, *A Whole Empire Walking: Refugees in Russia during World War I*, Bloomington, Indiana University Press

[Gatrell 2005]: Peter Gatrell, *Russia's First World War: A Social and Economic History*, Harlow, Pearson Longman

[Holquist 2002]: Peter Holquist, *Making War, Forging Revolution: Russia's Continuum of*

- Crisis, 1914-1921*, Cambridge, Harvard University Press
- [Lieven 1983]: D.C.B.Lieven, *Russia and the Origins of the First World War*, London, Macmillan
- [Sanborn 2003]: Joshua A. Sanborn, *Drafting the Russian Nation: Military Conscription, Total War, and Mass Politics, 1905-1925*, DeKalb, Northern Illinois University Press
- [Schafer 2001]: Daniel E. Schafer, "Local Politics and the Birth of the Republic of Bashkortostan, 1919-1920", in Ronald Grigor Suny and Terry Martin (eds.), *A State of Nations: Empire and Nation-Making in the Age of Lenin and Stalin*, Oxford, Oxford University Press
- [Smith 1999]: Jeremy Smith, *The Bolsheviks and the National Question, 1917-23*, Basingstoke, Macmillan
- [青木 1977]: 青木節也「民族革命」の運命——ウクライナにおける民族統一戦線の成立と解体 1917 - 1920」、菊地昌典編『ロシア革命論——歴史の復権』田畑書店
- [尼川 2001]: 尼川創二「ロシア革命とザカフカースの民族問題——「文化的民族自治」をめぐる論議と中心に」、『山口大学文学会誌』第 51 号
- [池田 2007]: 池田嘉郎『革命ロシアの共和国とネーション』山川出版社
- [石井 1991]: 石井規衛「ロシア＝ソ連史における政治文化の継続と革新」、近藤和彦・福井憲彦編『歴史の重さ——ヨーロッパの政治文化を考える』日本エディタースクール出版部
- [小沢 1995]: 小沢弘明「国民自決の原理・連邦構想」、歴史学研究会編『講座世界史 5 強者の論理——帝国主義の時代』東京大学出版会
- [勝田 2010]: 勝田俊輔「アイルランド」、近藤和彦編『イギリス史研究入門』山川出版社
- [加納 2001]: 加納格『ロシア帝国の民主化と国家統合——二十世紀初頭の改革と革命』御茶の水書房
- [塩川 2007]: 塩川伸明『国家の構築と解体——多民族国家ソ連の興亡 II』岩波書店
- [スタンケーヴィチ 1930]: 南満州鉄道株式会社庶務部調査課編『露西亞諸民族の研究』大阪毎日新聞社（ロシア語の原著 1921）
- [高橋 1990]: 高橋清治『民族の問題とペレストロイカ』平凡社
- [中井 1995]: 中井和夫「ウクライナ人とロシア人」、歴史学研究会編『講座世界史 5 強者の論理——帝国主義の時代』東京大学出版会
- [中澤 2009]: 中澤達哉『近代スロヴァキア国民形成思想史研究——『歴史なき民』の近代国民法人説』刀水書房
- [西山 2002]: 西山克典『ロシア革命と東方辺境地域——「帝国」秩序からの自立を求めて』北海道大学図書刊行会
- [メイヤ 1983]: A.J.メイヤ（斉藤孝・木畑洋一訳）『ウィルソン対レーニン——新外交の政治的起源 1917 - 1918 年』（I・II）岩波書店
- [山内 1986]: 山内昌之『スルタンガリエフの夢——イスラム世界とロシア革命』東京大学出版会
- [山室 2003]: 山室信一「国民帝国」論の射程」、山本有造編『帝国の研究——原理・類型・関係』名古屋大学出版会
- [和田 1983]: 和田春樹「ロシア革命に関する考察」、『歴史学研究』第 513 号
- [和田 1992]: 和田春樹『歴史としての社会主義』岩波新書